

十二月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

あこがれ

田宮朋子 新潟

入り日さす秋の草むらかぎりなき迷路のごとく影の入り組む
山の端に夕日が触れて没り果つるまでの二分半をたたずむ
古民家に虫のこゑしてある夜は芒が原に寝る心地する
あこがれは猫にもあらむ秋陽さす網戸に鼻をつけて風吸ふ
戸を開けてやればつかのま尾を振りて出るか出ないか思索する猫

銀柱

津金規雄 神奈川

白鳥からカシオペアへとしろがねの河横たはる身もあはあはと
沈黙の楽聴く想ひ 全天の星わづかづつ動きてゐれば
残暑なほやまぬ九月の真夜ふかく冬の星座のオリオン現はる
オリオンの三つ星のぼりくる時は縦一本の銀柱となる
星空のビギナーわれは子供向けガイドブックをくりかへし読む

幻住庵

小山 富紀子 京都

鳩の海見下ろし「やがて出じとさへ」思ひしと記す『幻住庵記』

よきほどに人家隔たる幻住庵風のまにまに早苗とる唄

蕉翁が清水で炊きし近江米さぞうまからむ今も湧く水

自が影と語る夜重ね四月経て幻住庵を離ると決めぬ

この清水最後にふふみ去りたるか元禄三年文月二十三日

泥人形

小島 なお*東京

絨毯をめくれば部屋を舞いあがる埃の綺羅に鹿の目が来る

青汁をかき混ぜて渦あさかぜはうまれてそよぐ産毛のうえを

阿佐ヶ谷に七夕飾りの銀テープ泥人形も下着をつけて

書いたそばから滲む絵馬 千切れれば雲の呼び名の変わるこの国

生肉に触れるトングを曇らせる落ち葉の間の脂の濁り

☆

☆



水鳥晴子 兵庫

白旗を掲げたままで歩み来た一生だった はじめに戦争
このやうにしか生きられなかつたそのことをかの人には知るや知りて過ぎしか
歩行車を押すわれと見て市役所の窓ぐちのひとと殊にもやさし
マイナカード受けて帰れば知事のかほ 思はずへたりこみたり椅子に
問題の人が育ちし家あたり映してへ放送協会とさわぐ

高野公彦 千葉

戦争難民増えゆく哀し高齢の我らに多きスマホ難民
奇譚集「花妖譚」読めば若き日の浪漫の人、司馬さんに会ふ
日本で最も多く使ふといふ(日)の字がわれの本名に住む
いのちとは長柄の橋の橋柱古りて朽ちゆくゆゑに尊き
青春を朱夏を白秋を過ぎていま玄冬なれど居酒屋樂し

奥村晃 作* 東京

私の知る限りでは東京のイトヒバ三木田柄の庭に
私の知る限りでは東京のイトヒバ一木田柄の畑に
自転車で十分田柄の上野家にイトヒバ四本あるとこそ知れ
イトヒバは品良き樹木乙女らの前髪のごと葉が垂れている
イトヒバは稀木、珍木なるゆゑに惹かれて止まらず巨樹イトヒバに

森重 香代子 山口

背屈め髪を洗ふは難儀にて週一われは粧院へ行く
粧院の帰りに寄りしデパ地下でひとりのための菜を買ふ
羽衣の山居に帰りつくまでにまだだいぶある喘ぎつつ登る
段丘の独り棲む家に帰り着き大きな安堵とともに荷を置く
隣り家の屋根に二羽ある山鳥に烈しく差せり秋の入り日は

影山一男 千葉

チキンラーメン茹でずに食べし十六の昭和の夏よ光りし海よ
コココーラ飲まなくなりし二十すぎ全学連の消えゆきし頃
サントリーレッドを飲みて歌語りせし友いづこ一人はや亡し
三月ほど隣人の死を知らずありひとつの箱に四十年住み
熱月の季節をもたぬ世を生きたる若きを羨しとも寂しとも思ふ

桑原正紀 東京

午すぎのしつき眠気パソコンに棲む憑神の仕業なるらむ
パソコンに棲む眠り神をりをりに誘惑してくる午すぎはなほ
意識ふと途切れたる間をスクリーンに「あ」が五、六行連なりみたり
ごしごしと顔を洗ひて眠り神、また怠け神こすり落とせり
選歌三つ原稿四つ十日にて上げねばならぬ九月の下旬

狩野一男 東京

歌舞伎町二丁目に在るクボモンの東京都立大久保病院
術式名・関節鏡下滑膜切除術なる手術されるか
はしづまは全身麻酔検査中。家族のわれは待ち、草臥れて
「おじいさんがポツンと独りいました」と、我を報告したる看護師
病棟で「三角巾のおばあさん」なんて呼ばれてゐるのか妻よ

宮里信輝 神奈川

見のかぎり広大な地に苗そだつ水のちからとお日さまにより
上流の宮ヶ瀬湖より絶えるなく流れ来る水中津川の水
2024年今年はおだやかで大雨もなく台風も少なく
コンバインまたは手刈りで秋晴れ日収穫をするお百姓さん
見の限り黄金に実る稲たちよ水のちからよお日さまの力よ

小島ゆかり 東京

八歳の孫との夏は炎天下 王冠のやうにかき水掲ぐ
酷熱のサファリパークをめぐるなり濃き血縁のをんな四人で
肉食獣みなよこたはる午後二時の銀網に似る直射日光
風上へかうべを上げて草食獣は肉食獣より涼しさうなり
眼まで夕焼けいろに日焼けしてなにか失ふ夏のをはりは

木畑紀子 京都

むずびたるころの庵いほりをりをりにひらけば聞こゆるどりのこゑ
痺れ指の運動「むすんでひらいて」を二十回してその手を合はす
むすばれし心の氷ひよりしづくしてひとすちのうたうまれくる夜半
子らうたふ「むすんでひらいて」百年のあそび歌はも作詞者不詳
むすんでひらいてそのあと自由老いわれは両手をうたの明かりに翳す

島田暉 神奈川

変声期過ぎてかすれる女子の声おしろい花の匂ふ夕闇
合唱を終へたる女子ら椅子に坐し心やさしきみづうみになる
ゆく秋の月の光にさそはれて真珠のやうな詩の生まれくる
せはしなきこの世を捨てて今朝よりは楽しく歩む死出の坂道
大仏がエプロンつけて歩み出す遠き銀河の厨へ向かふ

大松達知* 東京

おおぞらのファウルラインのようにあるひこうきくものこちらのセーフ
駅前の(華風网吧)看板を詩経を読むにあらざれど読む
代々のレシピをかたく守りに守り、羨ましくて、ふん、そんなもん
こはやはりしかしと訳すしかなくてしかしと訳すこの「Web」は
さまよえる湖うみのようにも膝裏の痒さは腿のあたりに移る

清水正子 神奈川

朝七時、回診の医師がチェックしぬ左股関節術後の傷を
病棟は若い看護師ばかりにてキラキラネームの七虹ななごさんゐる
時計回りやめて台風回りにす歩行練習のサークル押しして
ピアソラのタンゴ聞きつつリハビリの脚上げをするベッドでわれは
マスクでも隠しきれない頬ひげは無精ひげかしら セラピストKさん

小嶋一郎 佐賀

擦れ違ふ女童めわらべ二人「四の段」の九九唱へつつ頭をば下げたり
家までの一〇〇歩余の坂登り来て天に息吐くこのごろの癖
わが庭の五本の向日葵ひまわり倒し台風10号逃げてゆきたり
五百円貸したるままに二年経て会ひたる友とそのまま別る
庭隅のスマイレ一株所望するかかるとのつながり大事

福士りか 青森

朝ごとに稲架の増えゆくスピードの速ければ思ふ令和米騒動
スパーにふたつ残れる十キロ米六〇〇〇円にて顔を見合はす
米がない米がないとぞ煽りくるニュースそのちグルメ番組
節約のためにはじめて大根めし炊きましたのとオホホ夫人は
スピードをあげて円盤移動せり深き地中のハノイの塔は

藤野 早苗 福岡

秋草の黒繻子の帯締めたれば36度の街も秋なり

カボチャパイ焼いたと子より画像来るうた推敲する午前二時すぎ
できてゐたことができなくなる猫が得心ゆかぬといふ貌をせり
肉を食ふ欲失せたとれば皿あらひ水で事足る飲食の簡
結局は食はせたデータに作られて精度異なる人工知能

風間 博夫 千葉

ものおぼえ衰へゆくもあやまたず音数数へかぞへて詠まん
足裏がべたと触れてゐる土俵手のさきちよこつとでも触れる 負け
百円は拾ふであらう一円は見逃すだらうさて十円は

真つ直ぐに伸びてゐる道なればいふ一本道と果ては陽炎
くねくねと曲がりゆく道なれどいふ一本道と惑はずにゆけ

小島ゆかり著書二冊

はるかなる虹

第十六歌集
コスモス叢書第1236篇

短歌研究社

令和6年7月刊 三〇〇〇円(税別)

送料三〇〇円

サイレントニヤー

猫たちの歌物語
コスモス叢書第1241篇

短歌研究社

令和6年8月刊 一八〇〇円(税別)

送料三〇〇円

連絡先 〒112-0013 東京都文京区音羽一―一七―一四

音羽YKビル 短歌研究社

田中 愛子 埼玉

作品は三十五点で子だくさん(青いターバン)の画家の名出で来ず
同世代と思ひ語ればみな若く故郷の夏も涼しくはなし

どら焼きをふたつに割つて差し出せり夫はきつと小さきをえらぶ
長かつた炎暑の夏の句点とし聴けりジャンベのかわいた響き
ゆつくりとまばたきすれば糸とんぼ生まれさうなり秋のくさはら

大松達知歌集

令和6年1月刊 二五〇〇円(税別)

送料三〇〇円

ばんじろう

コスモス叢書第1233篇

六花書林

連絡先 〒170-0005

東京都豊島区南大塚三―二四―一〇

マリノホームズ1A 六花書林

高野公彦評論集

令和6年3月刊 二八〇〇円(税別)送料三〇〇円

歌の魅力の源泉を汲む

コスモス叢書第1235篇

柘書房

著者住所 〒272-0814

千葉県市川市塩焼一―二―一五〇六

斉藤梢歌集

令和6年7月刊 二三〇〇円(税別)

送料三〇〇円

青葉の闇へ

コスモス叢書第1237篇

柘書房

著者住所 〒982-0831

宮城県仙台市太白区八木山香澄町

二―一〇―一三〇六 薄葉様方

橘 芳 園 新 潟

光秀が攻めのほりたるさら坂親鸞の碑のひっそりと立つ
トレイルのコースとなれるさら坂若者二人追ひ越してゆく
親鸞が捨てし叡山のをちこちに「親鸞旧跡」の看板が立つ
さら坂下れば修学院離宮あり後水尾院の鬱屈思ふ
親鸞の真実信も後水尾院のつくりし庭もころをいやす

水 上 比呂美 東京

小さき子は小さき頭でかんがへる頭のなかの砂場を掘つて
（みずじゃーじゃー）の場面のページめくるとき笑ふ準備す絵本を見る子
先づコロナ、手足口病あかあかと病気になりたる娘の坊や
ブクショイと鼻水まじりのくしやみして涙なみだに溺れる娘の坊や
プール熱にかかる坊やは病みびとの風情で蒲団に寄りかかりたり

鈴 木 竹 志 愛知

歌の友達知和子さん逝去の報子息より届きぬ猛暑日の午後
いくつもの仕事抱へて楽しげに語らひし日の達知和子さん
書くことが生きがひと言ふ達知さんに同志を得たる思ひ湧きあし
手紙にはこなしめる原稿のこと書きてあり律儀なる人断りもせず
三重の地に達知さんのゐる時として心強き支へと思ひゐたりしに
原 賀 環 子 東京

転々と動く暮しのサーカスの23回ひつ越ししたり
しんぶんを古紙とし紐でたばねては運んでをりぬ誕生日の午後
カード受け電話をふたつもらひたり喜寿の手ごたへないまま笑ふ
街のうへ半月の反射光あをく天のみ秋の来てゐるらしき
式子でも晶子でもよく下の句の 月日は流れわたしは残る

水 上 芙 季 神奈川

指輪はまだわれの一部にならなくて夜ごと外して布団に入りぬ
着いた駅から薄墨色となる市営地下鉄のデジタルビジョン
裾野まで見せて富士山博多行新幹線の走りを目守る
モスキート音を捉へる毛のことを話す如雨露に水を足しつつ
有休は急激に減る腸炎になつて風邪ひき立ち上がれない

大 野 英 子 福岡

晩夏光に照らされ青葉は疲れざみそよく枝葉が眠気をさそふ
どこにゐてもひとりだけれどことさらに一人にひたりたい映画館
映画館の暗闇出でて真昼間のうちつけの陽に顔をさらせる
今日ひと日文字を追ひゐる図書館の絵本に寄りゆくふまぐれどき
波間より飛び立つ鳶がつかみゐる魚見ゆ鳶のみひらくさまも

松 尾 祥 子 東京

敬老に母が孫より貰ひたる色とりどりの菓子の（ふきよせ）
をさな子にもどりて母とわれと食む栗のクッキー、南瓜のサブレ
金平糖ほんのり甘く何もかももう忘れてもいいよ母さん
窓際に並ぶ机に座れとぞ職場に席のなくなるわれら
タイパ、コスパ、スベパ職場に必要な改革といふ猛暑の秋に
鈴 木 千 登 世 山口

曼珠沙華畔にもえつつ秋彼岸この熱帯夜いつまで続く
三五夜のしろきひかりを膝に受け夏の名残のかさぶた剥ぎぬ
月光に照らされ眠る奢をゆるす傷癒えにくき肉体しんたいとなれば
丸ごとの梨を食みてもなほ止まぬ渴きありけり銀河照る夜
瓶に差す曼珠沙華の花色褪せぬ野にたましひを置き来しやうに

小田部 雅 子 静岡

芋蔓が畑を覆ひて雑草も生えずゆつたりわが夏はゆく
頬あかき芋は干されて包まれて江戸へ常陸へ陸奥へ行く
三十年過ぎてじわじわ出でてきぬ事故の傷痕をして鈍痛
落ちてゐてもわがものだとは気づくまい皺ふかき手をつくづくと見る
東京は晴れてるさうな 十五夜の団子の皿の白きまんげつ

斉藤 梢 宮城

水色のワンピースでの夏があり われは未知への鼓動であつた
幼い日の幼いわたしになりて聞く山羊の鳴き声 なま温かい
桔梗色のかなしみが来て真夜中のわれの心はもうすでに秋
消耗を続けたのちにこの世から消えてゆくのか生き物として
青インクの一筆書きのバラの花おくりてくれしは小さな折り

うたを味わう―食べ物の歌 ●高野公彦

十二月の味 ―湯豆腐のうまさ―

簡素なる冬至の卓に湯豆腐は音に遅れ
て湯にをどりをり 草田 照子

司馬遼太郎の「花神」という長篇小説で
印象的だったのは、主人公の村田蔵六の
ちの太村益次郎が大の豆腐好きで、毎日豆
腐を食べていたことである。読んでいろう
ちに、いかにも豆腐がうまそうな感じがし
た。それにつられて、私もよく豆腐を食べ
た。

むろん、それ以前から豆腐は好きだった
し、また今も好きである。ただ、あのフニ

ヤフニヤした絹ごし豆腐は、嫌いだ。箸で
つかめないし、味も水っぽくて、いいと思
わない。やはり、身がしっかりと大豆の
味する木綿豆腐がいちばんである。

夏は冷や奴、冬は湯豆腐。

また、みそ汁に入れたり、すき焼や鍋物
の具にしたり、マーボ豆腐にしたり、食べ
方はじつにいろいろある。居酒屋に行くと、
肉豆腐もある。豆腐の副産物オカラも、適
当な量を入れて煮しめると、なかなかうま
い。

豆腐の原料はいうまでもなく大豆である。
大豆は用途の広い食材で、若いうちは枝豆

として食べ、成長した大豆は、煮て食べた
り炒って食べたりする。さらに、大豆を原
料として、味噌、醤油、納豆、豆腐、油揚
げなどの食品が作り出されている。どれも
日本人の好む食べ物である。もしかすると
日本は、世界最大の大豆消費国かもしれな
い。

寒い季節になると、湯豆腐が恋しくなる。
掲出歌(歌集『花火と飛行船』より)は、昆布
の煮だし汁を鍋に入れ、そこに豆腐を入れ
てコトコトと煮ている場面であろう。この
あと、豆腐を取り出し、醤油をつけ薬味を
添えてあつあつのところを食べる。日本人
でよかった、と思う瞬間である。